

梁啓超における啓蒙思想の理念

—その形成と問題—

佐藤 一樹

一、はじめに

一八九八年に『天演論』が刊行されたのを契機に、技術的側面に重点がおかれていた西洋文化の受容は、さらに思想の分野にまで大きく踏みこんだ。このことは既に異論のない所であろう。進化論を皮切りに、清末での社会主義や無政府主義、五四期に入ってからブラダマティズム、人道主義、個人主義など、西洋からの「新思想」は当時の知識人や学生に多大な影響を与えたのであった。もちろん、このことが伝統思想の全面的な屈服を意味するわけではない。たとえば章炳麟の存在が示すように、西洋文化と固有文化との対立をむしろ先鋭化させる場合も多かった。両者の対立が個人的なもの、あるいは一時的なものに留まる種類のものではないことは、たとえば一九二〇年代初頭に起こった東西文化論争や、さらに言えば、文化大革命の中のナ

シヨナリズムの例からも明らかであろう。西学受容を視野において、『天演論』以降の思想史を図式的に単純化するならば、もっぱら西洋的価値と伝統的価値の二つの軸をめぐって、受容、反発、融合、あるいは折衷という思想的展開が進められた過程としてまとめられることもできるであろう。

このような歴史の中で、西洋文化を全面的に評価、肯定する立場に立ち、伝統的なものすべてを否認したのが新文化運動であった。新文化運動は、一般に五四啓蒙とも呼ばれているが、それはこの運動が西洋の新しい理念や思想によって広範な人々の意識を啓発し、その基盤の上に社会を変革しようというものだったからである。

そして「啓蒙」という概念をこの意味で捉えるならば、本稿で取り上げる梁啓超も、また極めて啓蒙主義的な思想家であり、五四啓蒙の前駆者に位置しているとみなすこと

がさる。国民性の改造や倫理の革新を説く彼の代表的著作『新民説』（一九〇二—〇四）は、西洋の影響の下に人々の意識の覚醒を訴えた点で、まさに典型的な啓蒙論文であったし、また、梁が終始ジャーナリズム活動に従事し、不特定多数の読者に対し言論を展開したことも、啓蒙的活動のひとつとみなせよう。

しかしながら、明治の啓蒙運動を担った明六社に集まった知識人たちが、それぞれ多様な思想をもっていたように、一口に啓蒙思想といっても、その内容は千差万別である。五四期の啓蒙と梁啓超の啓蒙を、共に「西洋」全面肯定、伝統「全面否定」の図式に一括してまとめることは、無謀な試みであり生産的な議論でもないだろう。梁の啓蒙思想を検討する場合、特に注目されるのは、中国の伝統文化に対する彼の態度である。彼は、西洋思想を根拠とする数々の啓蒙的著作と同時に並行して、後年の名著『清代學術概論』（一九二二）に連なるような、伝統文化に対する新しい意味づけの作業を進めていた。このことは、梁の啓蒙思想の拠り所となった新しい理念が、たんに西洋文化を絶対視するだけに終わらなかつたことを意味する。

とすれば、ここで問題となるのは、中体西用論以来の課題である「中国」と「西洋」との関係が、梁内部の価値体

系において、どのように処理されていたか、である。そして、そこに彼の啓蒙思想の独自の特徴がみえてくるのではないだろうか。

本稿では、梁啓超の啓蒙思想の基礎となる、彼が最も高い価値を認めた新たな理念を明らかにし、その意味を中国近代の西学受容の歴史の中で考えてみる。⁽¹⁾

二、進化論と科学的精神

啓蒙という思想運動を幅広く解釈するならば、人々の知識を啓発するという点では、教育や出版活動もまたそれに含まれる。その意味で、変法運動のさなか、『時務報』を発行し、湖南時務学堂で教鞭をとった梁啓超は、当初から啓蒙運動に従事していたと言えよう。しかし、ここでは梁の啓蒙思想を、一九〇〇年後半から一九〇四年までのごく短い期間に限定して考える。一九〇〇年は、梁が戊戌政変からの再起をかけて計画した自立軍起義が挫折した年であり、それ以後彼は社会改革の方法の重点を、武力による権力奪取から言論活動を通じての民智啓発へと移動させたのであった。一方、一九〇五年には、梁がその政治的主張をそれまでの立憲論から開明専制論へと転換させ始め、彼の言論もそれにつれて、啓蒙的なものから政治的色彩の濃

いものに変化していったのだった。したがって、梁啓超の生涯にわたる活動全般に啓蒙的傾向はあるにしても、彼の啓蒙思想を、特色を明確にするための理念形として描くとするならば、この四年間の言論を精密に検討することが最も適切であると考えられる。

それではまず、この時期、彼に最も大きな影響を与えていたものは何であつたらうか。戊戌政変による日本亡命後、梁の言論に進化論の決定的影響が現われたことは、小野川秀美氏がつとに指摘されているが、梁の啓蒙主義の成立時期もそれにほぼ連続している。そこで、梁の啓蒙主義を、進化論から導き出された世界観、歴史観によつてなりたつものと解するのが一般となつて⁽³⁾いる。つまり、「進化論の生存競争、自然淘汰、優勝劣敗の公式を叫んで同胞の自覚を願う⁽⁴⁾」とする梁の進化論の喧伝を、そのまま啓蒙主義の民智啓発として位置づけていたのである。

だが、進化論からの影響関係だけで梁の啓蒙思想を判断するのは、十分な分析とはいえない。進化論が梁の思想に密接な関係があるとすれば、なぜ彼は進化論を啓蒙の根幹に据えるほど高く評価したのか、この問題を解くことも彼の啓蒙思想の本質を捉えるためには欠かせないだろう。多くの理論や思想の中から進化論を選択した要因とし

て、まず二つの外面的条件が考えられる。ひとつは、中国が参入したばかりの弱肉強食の帝国主義的国際秩序に、進化論がよく合致する理論であつたこと、いまひとつは、梁の基礎的教養であつた公羊学の説く「三世進化説」とは、歴史の進化の概念において、進化論は相矛盾するものではなかつたことである。「論君政民政相嬪之理」(一八九七)にみられるように、変法運動の時期から、梁にとり「進化」は変革を主張するための最も有力な概念であつた。

ただ、この二つの条件は、受容する側の状況に進化論が適合していた証明にはなつても、進化論に対する梁の内面からの評価を説明してはいない。一人の人間が、ある理論を自己の思想の根幹に置こうとするならば、より積極的な意味づけの作業を行うのではないだろうか。以下、その手がかりとして、梁が進化論の思想的意義を論じた文章をみてみよう。

「ダーウィンの『種の起源』が世に出て以来、全世界の思想界に新天地が忽焉と開かれ、有形の科学がそのために一変したばかりでなく、歴史学、政治学、経済学、社会学、宗教学、倫理・道徳学に至るまで、その影響を受けないものはなかつた。さらにスペンサーが、万物を一炉に溶かしこむように総合し、複雑で入り組んだ現象

を、一貫した原理によって、体系的な一大学説にまとめあげたのである。まことにここ四十年來は一進化論の天下である。唯物主義が勃興し、唯心主義は一隅に押しやられた。科学（原注：狭義の科学を指す。中国でいう格致である。）が盛んとなり、宗教はほとんど余命すら保ちえない。進化論は、⁽⁶⁾実、数千年來の旧学を根底からくつがえしたものである。」

ここで注目されるのは、まず第一に、進化論の出現を、たんに中国にとって衝撃だったとするのではなく、世界全体のレベルでの学術史、あるいは思想史における事件として語っていることである、これは、進化論の受容が、西洋文化の一つを中国に移入するというよりも、むしろ普遍的な最新の学術の成果を摂取することとして、梁の意識の上では操作されていたことを示すものである。このような進化論に対する認識を西学受容の歴史の文脈の中においてみるならば、中体西用論や附会説にみられるような西洋文化と伝統価値とのバランスを問題にする考え方から、梁は既に脱け出ていたと言える。彼の啓蒙思想では、中—西の対立よりも新—旧の対立の方に比重が移動したのである。⁽⁶⁾

もちろん、新しい理論ということだけに進化論の意味があったのではない。引用文中で「唯物主義」が「唯心主義」

に、「科学」が「宗教」に対置されているように、「科学性」への評価が梁の進化論受容の第二の特色である。進化論は「廣大無辺な対象を取り扱う博物学から導き出された「科学的」新理論であり、だからこそ、「およそ人類が認識しうる現象の中で、進化の大理によって貫徹できないものはない」⁽⁷⁾ような、東西共通の普遍性をもつ「客観的真理」であると梁は受け止めたのだった。

進化論をこのように評価した眼で中国の現状を見てみれば、中国における科学の分野の決定的な遅れを痛感せざるをえず、梁は次のように慨嘆するのである。

「わが中国の哲学、政治学、経済学、社会学、心理学、倫理学、歴史学、文学など、どれもここ二、三百年來、西洋に大きく遅れをとることはなかったが、ひとときわ欠落していたのが自然科学である。虚理を軽視するわけではないが、実験によってこそ真理が得られるのだ。わが国の学術が停滞して進歩しないのは、全くここに起因するのである。」⁽⁸⁾

それでは科学の面で大きく立ち遅れた中国は、それらの学術の成果を全面的に西洋から輸入すれば、事足りるのだろうか。たしかに梁は、「必ずしも自ら新説を出さなくとも、真剣な気持、高邁な精神、流麗な文章によって他国の

文明や新思想を祖国に移植して、同胞のために貢献できる⁽⁹⁾と述べたこともあった。しかし、伝統的教育を人一倍受けた彼が、そうした便宜主義的な外国依存の態度で満足することはなかったようである。「新民説」で、彼は中国内部からの革新の必要性を次のように説いている。

「民を新たにすると、わが民が旧物をすべて棄て、他人に従うことを望むのではない。『新』の意味する所は二つある。第一に固有のものを鍊磨して新たにすること、第二に従来無かったものを採補して新たにすることである。両者のどちらが欠けても無意味となってしまう。」⁽¹⁰⁾

梁の啓蒙は、もっぱら既成の西洋の理論を「採補」、紹介する方法の枠内に留まらず、中国自身が伝統文化を「鍊磨」して新しいものを創造してゆくことを、視野に入れていたのであった。そして進化論は、この二つの啓蒙の課題を同時に満たすものだったである。つまり、それは、それまでの中国に存在しなかった革新的な原理であるとともに、中国が自己革新を遂げるのに必要な精神を示す理論なのである。進化論が示す精神が、「科学的精神」に他ならないのは自ずと明らかであろう。科学によらない理論は、たとえそれが新しいものでしても、現実の改革には役立た

ない「虚理」に過ぎないのである。

それでは中国に科学を定着、発展させるにはどうしたらよいのだろうか。新しい学問を創造する「科学的精神」を進化論に見出だした梁啓超は、さらに、中国における科学の発展を阻害してきた精神風土や思考様式に対する革新までを、その啓蒙の課題に含めるようになるのであった。

三、伝統からの自由

梁啓超の啓蒙を実際の言論活動に即してみるならば、彼の発行した『清議報』や『新民叢報』の中では、西洋の諸思想の紹介が比較的大きな比重を占めていることに気がつく。アリストテレスに始まり、ホッブス、デカルト、ベークン、スピノザ、モンテスキュー、ルソー等、実に多種多様ではあるが、体系的な紹介とは言い難い。だが、西洋との思想的接触がごく初歩的段階にあった当時において、まず単純に、多くの西洋の諸思想に関する知識を提供することも、おろそかにできない作業であったのだ。背後にある精神や思考様式を知るためにも、西洋からの情報量を拡大しなければならなかったのである。

また、梁の啓蒙思想が、進化論を媒介として、「科学的精神」による中国の自己再生を求めていたのならば、これ

ら西洋思想の紹介も、彼の啓蒙理念との関連で考えることもできよう。啓蒙活動重視の態度を表明した一九〇〇年の『清議報』百号を記念する文章では、「紹介」の意義を次のように説明している。

「およそ新しい国民を育成しようとするならば、その国古来の誤った理想を一掃し、考え方を変えねばならない。この目的を達するには、つねに他社会の事物や理論を輸入して調和させることが必要である。それはちょうど、南北両極の寒流が赤道の暖流と混ざって新海流となり、万年雪をいただく高山の冷気が地上の熱気に触れて新気流となるのに似ている。それ故、知識の交換は実に人生第一の要件であり、報館の天職は世界各国の新思想を選んで同胞に供することにある。」

この言葉からわかるのは、外国の思想を不可変の完成された理論として受け容れるのではなく、あくまで中国固有の思想との「調和」や「交換」の対象としてみなしていることである。もちろん、それらの外国思想に新しい意義や価値を認めただからこそ、梁は精力的な「紹介」の対象としたのだろうが、それとともに、そうした新しい思想が在来のものにどれだけ大きな衝撃を与えうるかということにも、多大の期待を抱いていたのであった。

これを伝統思想に即した視点によって捉え直すならば、梁の「紹介」の意図は、中国人の精神を伝統の桎梏から解放することにあったと言えよう。彼は当時の中国を、「古人の言論、行跡について批判の辞を口にしないのみならず、懐疑の念すら持とうともしない」精神状況とみていたのである。たとえば、超歴史的、絶対的な権威をもつ経書によって現実社会を解釈してゆこうとする経学的思考法などが、ここでの批判の実体と考えられる。

一方、西洋でも、中世から受け継がれたキリスト教の世界観・価値観が人々を束縛するものとして存在したが、「欧州の今日あるのは、すべて教皇のくびきを脱したことに¹⁴⁾による」と述べるように、精神がそうした束縛から既に解放されたと梁はみていた。そしてそれに代わるものが、先験的価値から自由になり、一個の独立した人間として思索し、発見する精神であった。梁はそのような精神を、「われに耳目あり、わが物はわれ究む。われに心思あり。わが理はわれ窮む¹⁵⁾」という言葉で、高らかに謳いあげたのだった。

「文明が進歩する要因はさまざまであるが、思想の自由が、その総因である」と述べる「保教非所以尊孔論」（一九〇二）は殊に精神の自由を強調した論文である。それはこの論文が、思想の自由なる営為を束縛するとして、康有為

の主張する孔子教の国教化に反対するために書かれたためであった。その中で次のような言葉がある。

「かの宗教なる者は、社会進化第二期の文明とは相容れることはない。科学の力が日々盛んになれば迷信の力は衰退し、自由の境界が日々拡大すれば神権の境界は縮小するのである。」

彼はここで、思想の発展の障害となる宗教や迷信に対抗するものとして、「自由」とともに「科学」を挙げている。たしかに、科学的知見は人々を歴史的偏見から解放するものであるし、逆に、自由な精神が存在しなければ科学の探究も成果を収めることはできないであろう。その意味において、ものごとを創造する「科学的精神」と、伝統の束縛から脱け出た「自由で独立した精神」とは、梁啓超の啓蒙の理念として表裏一体のものであった。

つけ加えて言うならば、梁は伝統による束縛について厳しく批判するが、それは伝統文化の否定を意味するものではなかった。「清の学者は実事求是を学問の目的とし、科学的精神に富んでおり、また分業の組織も援用した。」と述べているように、彼はむしろ、中国の伝統の中に啓蒙の理念——とくに「科学」をみつけようとしてもしていたのである。思想の自由を束縛するのは伝統だけではなく、西洋文

化である可能性もあった。自由・独立の精神を啓蒙の理念とする梁啓超が、「第一に中国旧学の奴隷となることなく、第二に西人新学の奴隷にもなることない。」立場を自ら保つには、新しい視点からの中国文化に対する再評価の作業がぜひとも必要だったのである。後年、梁は、『中国でもなく、西洋でもない。中国でもあり、西洋でもある』新学派を形成しようとした⁴⁰と回顧している。彼の啓蒙主義が全面西洋化を意図しなかったことは前節でも触れたが、他方、中国と西洋との二分法を完全に超越した訳でもなかったと考えられよう。

四、啓蒙理念と公理

梁啓超は、一方で「科学」や「自由・独立」の理念による精神的啓蒙を指向しながら、それだけで満足することなく、より具体的な改革の方向をも提示しようとした。一九〇〇年に発表された『自由書』の一節で、彼は西洋の学者の説からの紹介として、人類の文明の発展を「野蛮」「半開」「文明」の三段階に分類している。このうち「半開」の段階と「文明」の段階との違いは、前者は「事物の理を談ずる場合でも、疑問を投げかけて真実を求めようとしなない。模倣する技巧には長じているが、創造の能力には乏しい」

状態であり、反面、後者の方には「世の中のさまざまなる事物を法則として把握して、みずからその法則に従って創造する」姿勢があることであつた。

両者の差は「模倣」と「創造」との間にあるが、それは同時に、現象を把握する「法則」の有無の違いでもあつたと指摘できる。三世進化説を根拠とする変法運動に参加して以来、つねに改革の先端に立ってきた梁にとつて、社会をトータルに捉える理論の存在は不可欠であり、またその有効性も自然に理解しえたのである。改革のための根本理論については次のようにも述べている。

「理論には『理論の理論』と『実事の理論』の二種がある。『理論の理論』は『実事の理論』の母でもある。(中略)民智がやや進歩すると、個々の事物や学問から共通の原理、原則を抽出しようとする。共通の原理、原則が得られれば、それを社会の諸現象に適應して、社会の欠点を是正しようとする。」

ここで言う「理論の理論」は共通法則、あるいは根本原理として、「実事の理論」は個別法則、または具体的理論と解釈するのが適當であらう。

社会の変革のためには、教育、政治経済など個々の分野での体制改革の方案を提出しなければならないが、それら

の方案が正しい方向を目指し、かつ効果的であるためには、歴史や社会の發展を統一的な理論によつて把握するのが先決であると梁はここで主張したのである。個別の対症的改良に留まることなく、社会をトータルに変革しようとした梁のこうした姿勢そのものは高く評価したい。しかしながら、反面、このような改革における統一的理論の希求が、自由で独立した科学的精神という梁の啓蒙理念と、深刻な自己撞着を引き起こしたのであつた。

梁の認識によれば、中国の改革理論の現状は、「今日に至つて、いわゆる『理論の理論』がやつと萌芽しだした」にすぎない。中国においてそのような理論が未だ十分醸成されていないとすれば、もはや一日の停滞も許されない程さし迫つた中国の改革は、何によつて根拠が与えられ、方向づけされるのだろうか。彼の結論は結局、「科学的精神」の成果の象徴である進化論を、改革のための根本原理としても認めることであつた。彼は根本原理としての進化論を「公理」という言葉で次のように表現した。

「地球上の人類からすべての事物に至るまで、みな進化の公理に従う。」

「生存競争は天下・万物の公理である。」

「公理」は清末の洋務論から五四運動に至るまでの多く

の改革論の中で、変革の必然性を説き、あるいは新しい原理を示す際に多用された言葉であった。それはこの言葉が、「公」や「理」の語のもつ歴史的イメージから、「誰もが無条件で尊重し従うべき普遍的原理」とも言うべき、強い規範的ニュアンスをもつからであった。章炳麟が、「天理」以上に人々を束縛するものとして、「公理」を厳しく批判していることから、「公理」がもつ絶対性、規範性は明らかであろう。先験的価値としての「公理」と、「思想の自由」を重んじる梁の啓蒙思想とは、根底から相反する性格のものであったのである。にもかかわらず、彼は「公理」を用いる意識を批判することはなく、逆にみずから、この言葉を進化論に冠することによって改革の根本原理と認定したのであった。ここに、梁の啓蒙思想の脆弱性と破綻とをみることが出来る。進化論を「公理」とみただけことは、「自由で独立した科学的精神」を標榜した彼の啓蒙の理念の役割を、無に帰してしまったといっても過言ではないのである。

梁の啓蒙のこうした脆弱性の背景には、中国社会の発展段階から由来する状況的限界がまず挙げられよう。彼は科学的思考の必要性和有効性を熱心に説きながらも、みずから直接に、何らかの科学的学問に従事し、そこから深い精神

的影響を受けるような経験はもたなかった。彼が西洋の学術の中から「科学的精神」の意義を発見したことは、たしかに、すぐれた思索の結果として大きな意味をもつ。だが、彼の啓蒙理念がそうした観念的思索から生まれたために、そこにみずからも理念に徹しえない「弱さ」が指摘されるのではないだろうか。加えて、教育制度や大規模産業がまだ未発達だった当時の中国では、近代科学の一端に実際に接触する機会をもったのはごく少数の人々を除いていなかったことにも留意すべきである。観念の上で進化論を公理とみなす基盤は、梁啓超ばかりでなく、思想を受けとめる多数の人々の頭の中にも強固に存在していたのであった。さらにまた、進化論が安易に公理と結びつけられたのは、梁の個人的心情にもよるのである。梁にとって中国の改革はつねに焦眉の課題として存在していたが、そのために、彼の改革論には成果の速効性を期待する性急さを伴っていたようにみうけられる。政治改革の論議において、一時は革命論にかなり接近するものも、あるいは、立憲制の意義を認めながら実現への悲観的展望から開明専制論へと転換したのも、この性急さが一因であった。まして、不特定多数の人々を対象とし、きわめて緩慢な速度でしか進展しえない精神啓蒙を通じての改革は、政治による体制改革と

比べて、梁にとってはあまりにも迂遠な方法であった。そこで、せて目にみえる形で改革と結びつけようとしたのが、進化論を公理として喧伝することであった。

つまり、啓蒙思想家梁啓超は、思想家としての面と改革者としての面の二面を併せもち、前者は西洋文明の背後にある精神への注目をもたらし、後者は改革のための実体的ある「法則」への希求をもたらし、とまとめることができよう。この二つの面が有機的に結びつくことなく、かえって互いに矛盾する存在となった所に、梁の啓蒙思想の不徹底さが生じたのであった。

五、まとめ

最後に梁の啓蒙思想と五四啓蒙との関連に、西学受容の問題から触れておく。

「自由、独立の科学的精神」という梁の啓蒙理念は、人々の思考を伝統の束縛から解放させただけではなく、中国と西洋とを対立させて考える傾向からも自由にした。それによって、清末の思想的懸案であった西洋文化の中国への導入は、「中国」と「西洋」という二つの相容れあうことのない観念的な価値の次元から、「科学的真理」という概念を媒介とすることによって、価値中立的な学問の次元へ

とひとまずひきおろされたのであった。

ただ、前節で述べたような梁の啓蒙のもつ矛盾や破綻のため、科学的判断の重要性が認識されつつも、結局、新しく生まれたものは常に価値あるもの、古いものは無意味なもの、単純化されて受け取られがちであった。五四啓蒙においても、こうした新―旧の対立軸は、社会を認識する際の重要な枠組となるが、たとえば進化論をそうした枠組で解釈したのが、陳独秀の有名な「敬告青年」の冒頭の次の一節である。

「新旧は代謝し、陳腐老朽なものは時々刻々自然淘汰の途上にあつて、新鮮活発なものに空間的地位と時間的生命を譲るのである。人体がこの新陳代謝の道に従えば健康であり、陳腐老朽の細胞が充満すれば人は死ぬ。社会が新陳代謝の道に従えば隆盛になり、陳腐老朽の分子が充満すれば社会は滅びる。」

このように、西洋文化の受容に伴い必然的に生まれた「中―西」の対立は、五四啓蒙期には「新―旧」の対立へと明快に転化したのだった。そしてこの両者の橋渡しの役割を果たしたのが、梁啓超の「科学的精神」の理念による不徹底な啓蒙だったのである。

注

- (1) 梁啓超についての研究は多数あるが、以下に本稿の内容とくに関係あると思われる論文だけを挙げておく。小野川秀美「清末の思想と進化論」(『清末政治思想研究』みすず書房、一九六九)、佐藤慎一「清末啓蒙思想」の成立・世界像の変容を中心として」(『国家学会雑誌』第九二巻、第五・六号、一九七九)、李沢厚「梁啓超王国維簡論」(『中国近代思想史論』人民出版社、一九七九)
- (2) 小野川、前掲書、二六〇頁。
- (3) 同前、二六二—二六四頁。梁の対外認識と進化論の関係を論じている例は次のものが挙げられる。坂出祥伸「梁啓超の政治思想—日本亡命から革命派との論戦まで」(『中国近代の思想と科学』同朋舎出版、一九八三)二八八—二九〇頁。
- (4) 梁啓超「清議報一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴」(一九〇一)『飲冰室文集』巻六、五四頁。(上海中華書局版。以下、梁啓超の著作については著者名を省略し、『飲冰室文集』『飲冰室專集』はそれぞれ『文集』『專集』と簡称する。)
- (5) 「進化論革命者頌徳之学説」(一九〇二)『文集』巻二、七九頁。
- (6) 歴史の進化を肯定する「三世進化説」を背景に、「変ずることとは古今の公理である。」(『変法通義・自序』一八九六、『文集』巻一、一頁)と変法論の冒頭で断言したように、梁啓超には、後から来るもの、新しいものに価値をおく心的傾向が一貫してあった。ダーウィンからスペンサーへ、ルソーからブルンチュリへと、彼の着目する思想が変化してゆき、一方では、社会主

義に注目するのも、客観状況の変化に原因があるばかりでなく彼のそのような心的傾向とも関連するように思われる。

(7) 「論學術之勢力左右世界」(一九〇二)『文集』巻六、一一四頁。

- (8) 「格致学沿革考略」(一九〇二)『文集』巻一、三頁。
- (9) 「論學術之勢力左右世界」、『文集』巻六、一一五頁。
- (10) 「新民説・積新民之義」(一九〇二)『專集』巻四、五頁。
- (11) 「清議報一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴」、『文集』巻六、五〇—五一頁。
- (12) 梁は「もし外国學術の輸入が盛んになれば、間接的影響として国学にも必ず活気がでてくると、私は断言する。」と述べている。「論中国學術思想變遷之大勢」(一九〇四)『文集』巻七、一〇四頁、
- (13) 「新民説・論自由」(一九〇二)『專集』巻四、四七頁。
- (14) 「光緒二十八年四月、与夫子大人書」(一九〇二)『梁啓超年譜長編』(上海人民出版社、一九八三)二七七頁。
- (15) 「新民説・論自由」『專集』巻四、四八頁。
- (16) 「保教非所以尊孔論」『文集』九、五五頁。
- (17) 同前、五三頁。
- (18) 「論中国學術思想變遷之大勢」『文集』巻七、八七頁。
- (19) 「近世文明初祖二大家之学説」(一九〇二)『文集』巻一三、一一頁。
- (20) 「清代學術概論」(一九二二)『專集』巻二四、七一頁。
- (21) 「自由書、文野三界之別」(一九〇〇)『專集』巻二、八一—九

頁。

(22) 「新民議」(一九〇二)『文集』卷七、一〇五頁。

(23) 同前。

(24) 「論學術之勢力左右世界」『文集』卷六、一一四頁。

(25) 「自由書、豪傑之公腦」、『專集』卷二、三三三頁。

(26) 「公理」概念については、武仲弘明「清末民国初における公理意識とナショナリズム」(『歴史学研究』四一五、一九七四)を参照せよ。

(27) 章炳麟「四惑論」(『民報』二二号、一九〇八)

(28) 小野川、前掲書、二六四頁。あるいは野村浩一「民族革命思想の形成―『革命派』と『改良派』の思想―」(『近代中国の政治と思想』筑摩書房、一九六四)一七五頁。

(29) 「開明專制論」(一九〇六)『文集』卷一七、三八―三九頁。

(30) 汪叔潜「新旧問題」(一九一五、『青年雜誌』第一卷、第一号)では、「旧」との対比により「新」を強調するのが当時の社会風潮だったとしている。

(31) 陳独秀「敬告青年」、同前。